

日本人の桜好き

今年も見事な満開の花を咲かせあつという間に散った桜は、時にはこの世の諸行無常を暗示的に伝えてくれる。今も昔も日本人の心に世の儚さを訴え、桜を想うとついセンチメンタルな気持ちにとらわれる。

昔から「花は桜木人は武士」と詠われ、陸軍の歩兵行進歌「万葉の桜」や、海軍予科練「同期の桜」のように、日本人の大和魂を一瞬で散りゆく桜に譬えられることも多かった。

大東亜戦争中の激しい戦地でも、良きにつけ悪しきにつけ軍隊と桜の絆は切れなかった。軍隊の中にも余裕があれば、戦地でもお花見を楽しもうとの気持ちは強かったようである。

しかし、現実には外地ではなかなか桜にお目にかかれない。それが意外にも南国ビルマの中部高原、メイヨウやカローだけは例外だった。1月になると日本以上に艶やかな桜が咲き誇った。インパール作戦で評判を落とした第十五軍司令官牟田口廉也中将の如きは、お花見が好きで灼熱の都市マンダレーを避け、車で三時間ばかり離れたこの冷涼な高原メイヨウに司令部を置き、どっぷりお花見気分に入った。それが牟田口の悪評に追い討ちをかけることにもなった。

それにしても1月のメイヨウの桜並木は見事なものである。外国でも近年はアメリカの首都ワシントンの桜が見事だと、わざわざ桜見物にワシントンへ出かける旅行者も現れた。ところが案外知られていないのが、ロッキー山脈の山懐に抱かれ、マイル・ハイ・シティ(標高 1,600m)と言われるコロラド州デンバーの夏の桜である。6月には、何と街の中心「さくら・スクエア」で桜祭りが開かれ、その周辺には桜ムードが溢れるのである。

日本の桜だけにこだわらず、機会があればデンバーへも出かけ、ロッキー山麓で雪見酒を楽しみながら、初夏の桜情緒に浸るのもオツなものである。

(近藤)